

雲をつかむ：原美術館／原六郎コレクション

【春夏季|後期】2022年7月1日[金]ー9月4日[日]

出品作品

1*

アニッシュ カプーア

虚空

顔料、ファイバークラス

1992年

128.0 x 97.0 x 92.5 cm

2*

エドワード ルシェ

Nothing and Everything

カンヴァスにアクリル絵具

1990年

91.8 x 121.8 cm

3-8*

森村 泰昌

表情研究 IX, VII, III, IV, V, VIII

1994年

ゼラチンシルバークラウド

各 48 x 42 cm

9

ときんかんのん

鍍金観音

一軀 | 銅鍍金

六朝～隋時代 (6世紀頃)

10

狩野派／かのうは

かちょうず

花鳥図 (三井寺旧日光院客殿障壁画)

四幅 | 紙本墨画

桃山～江戸時代 (16～17世紀)

11

狩野永徳／かのうえいとく

とらず

虎図 (三井寺旧日光院客殿障壁画)

一幅 | 紙本墨画

桃山時代 (16世紀)

12*

ぶつねはんず

仏涅槃図

一幅 | 絹本著色

桃山時代 (16世紀)

13

須田悦弘

此レハ飲水ニ非ズ「鉄線」

木

2001/2020年

サイズ可変

14

アルマン

時計

プレキシグラス、腕時計

1979年

32.5 x 25 x 5 cm

15*

狩野派／かのうは

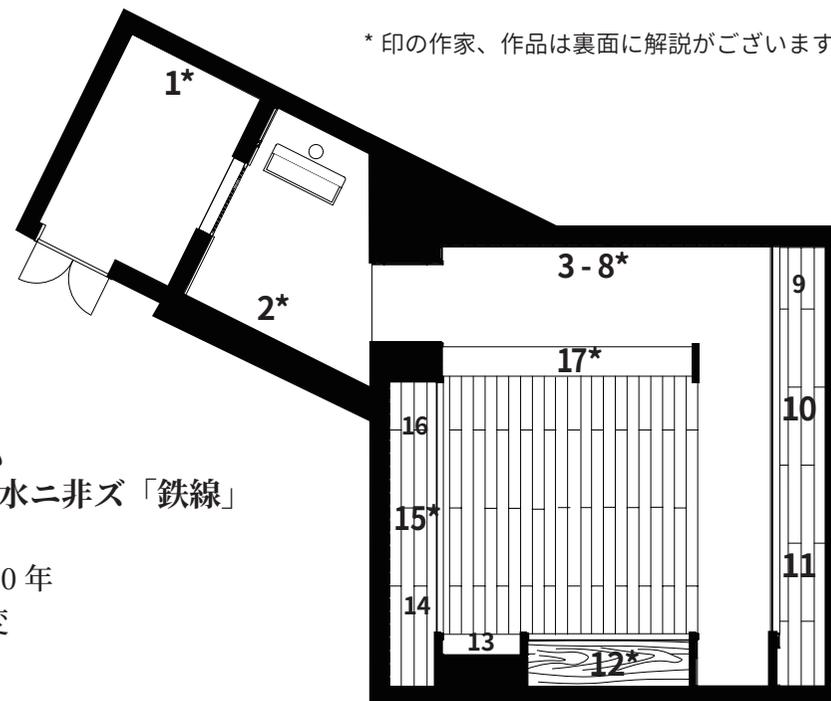
うんりゅうず

雲龍図 (三井寺旧日光院客殿障壁画)

双幅 | 紙本墨画

桃山～江戸時代 (16～17世紀)

* 印の作家、作品は裏面に解説がございます



16

えんまおうぞう

閻魔王像

一基 | 木彫彩色

室町時代中期

(14世紀後期～15世紀)

17*

円山応挙／まるやまおうきよ

よどがわりょうがんずかんしたず

淀川兩岸図巻 下図

一卷 | 紙本墨画

江戸時代 宝暦十三年 (1763年)

HARA MUSEUM ARC 特別展示室 観海庵 解説

1. アニッシュ カプーア (1954-)

アニッシュ カプーアはインドのボンベイ(現ムンバイ)に生まれ、ロンドンで美術を学んだ。1979年のインド旅行をきっかけに顔料の使用を始め、80年代半ばには、本作のように青の顔料を多用するようになった。光の吸収率が高い顔料を用いることでシンプルな形態の中に無限の奥行きと広がりが見られる一連の作品は、鑑賞者の感覚に直接的に働きかけ、ある種の畏怖を漂わせている。ヒンドゥー的な宇宙観を表しているとも評され、美術界における欧米中心の評価の枠組みを越えた作品といえるだろう。

2. エドワード ルシェ (1937-)

エドワード ルシェは、絵画や版画、写真など自在に制作する中で、活動の初期から、主に彼が暮らすアメリカ西海岸で目にする広告や耳にする言葉を描く「言葉絵画」を始めている。描かれた語句は、カンヴァスと絵具という物質であり、絵画というイリュージョンであり、グラフィックであり、象徴であり、記号でもある。「Nothing and Everything」を直訳すれば「なにもない そして すべてある」や「なにもないことと すべてあること」。それは、何もないこと(または「Nothing」と描かれていること)が全てである、と解釈することも、「何もないこと」と「全てあること」の間にどんな違いがあるのか、と意識することもできるだろう。文脈から切り離された相反する言葉の並列が何を意味するのかは、最終的に鑑賞者の思考にゆだねられている。

3~8. 森村 泰昌 (1951-)

名画や映画の登場人物あるいは歴史上の人物に自らが扮する自画像で知られる森村泰昌。『肖像(ゴッホ)』(1985)で一躍脚光を浴びて以来、巧みなメイクや衣装で、時代や人種、性別を超えて様々な人物に自らが成り代わる手法を通し、原作やその背景に独自の解釈を加えるとともに「私」とは何かという問いに真摯に取り組んでいる。本作は、17世紀オランダの画家 レンブラントによる素描の自画像を引用した作品。レンブラントは自画像を描くことで人間の内面を学んだとされる。「森村泰昌ーレンブラントの部屋」展(1994年、原美術館)を機に原美術館コレクションに所収。原美術館ARC内には、原美術館から移設・リニューアルした『輪舞(双子)』が常設展示されている。

12. 「仏涅槃図」一幅 桃山時代(16世紀)

本図は、仏伝の一場面である釈迦の涅槃の様子が色彩鮮やかに描かれている。縦長の画面の下半部に釈迦の横たわる宝台とそれを取り囲む会衆を描き、その手前には象・獅子をはじめ多数の動物を集めている。画面上半部には、波を大きくうねらせる跋提河(ぼっだいが)を背景に大きく天空を描き、釈迦の生母である麻耶夫人(まやぶにん)が地上に降りてくる場面をあらわしている。

15. 狩野派「雲龍図」* 双幅 桃山~江戸時代(16~17世紀)

龍は八部衆(仏法を守護する八つの神)の一つで、雲および雨をもたらす存在とされ、雲龍図は、多くの画人が描いてきた画題であり、寺院の天井画として制作されることが多い。本図は余白をたっぷりとした画面構成の中に、雲の合間から姿を覗かせた龍の鋭い眼と長く太い髭が印象的である。

*「三井寺旧日光院客殿障壁画」は、もと滋賀県大津市の三井寺(園城寺)の日光院客殿を飾っていた障壁画である。原六郎が明治時代中期、財政難で障壁画の維持に困難があった三井寺から日光院客殿を建物ごと買い取ったもので、品川区の自宅庭園内に移築し、名を慶長館と改めて保存した。桃山時代建立とされる建物は、昭和初期に文京区の護国寺へ寄進・再移築され、護国寺月光殿として今日に至る。

現在は保存の観点から建物とは別にし、47幅の掛軸と6曲1双の屏風に仕立て直されている。この作品群が散逸せず、まとまった状態を保って伝えられたことには大きな意義があり、狩野永徳をはじめ、近世初期の狩野派による重要な作例として注目されるものである。なお、10.「花鳥図」と、11.「虎図」はその図様から、日光院下ノ間の南側の間仕切りとして一繋がり描かれたものと考えられる。

17. 円山応挙「淀川両岸図巻 下図」一卷 江戸時代 宝暦十三年(1763年)

円山応挙(1733-95)が明和二年(1765)に描いた「淀川両岸図巻」(絹本着色、原六郎コレクション)の下図。群青を使った水面の微細な表現、精緻な風景描写が印象深い、長大な画卷のために準備された。各地点の地名が書かれ、本画を鑑賞する資料にもなる。琵琶湖を源流として大阪湾に流れ込む淀川の流れを中央に、沿岸を舟から見る視線で俯瞰的に描いたと考えられる構図が特徴的である。水流や人物などの描写は簡略化されているが、川の流れ、水の色、両岸で生活する人々の様子が想像できる。応挙は大画面に描いた山や川・動物などが、鑑賞者の現実の空間と一体になるような「写生」のスタイルを創り出した。30代前半に描かれた本図は、その第一歩となる作品と位置づけられている。